
~ Artificial ~

榎吾春樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Artificial

【Nコード】

N7129X

【作者名】

檉吾春樹

【あらすじ】

主人公の翼は、魔術師だということを隠して生活していた。そんな時、ある後輩と出会って様々な事件に巻き込まれてしまう。彼の平凡な日常は、二人の少女の影響で姿を変えていくのだった。

誤字脱字、変換ミスなどがあり、読みにくくてすいません。

4月になったら、一旦削除します。ご了承ください。

ブローグ

去年の春。僕は故郷の高校に入学した。それから一年。僕は進級し、後輩も出来た。だけど、この後輩のおかげで様々な事件に巻き込まれることになるうとは、この時の僕は予想しなかっただろう。

怪談好きの後輩と、無表情な先輩。

僕たちは、こう呼ばれていた。

今日も、後輩が笑顔で入ってきた。また、何か情報があるのか。それとも、謎か。

これから、始まる物語の先には何が待っているのだろうか。純白の光か、それとも漆黒の闇か。どちらに転ぶかは、僕達次第だ。

嘘とマジック 1 (前書き)

長かったので、分割しました…

嘘とマジック 1

僕、高瀬翼は月樹高校の二年生だ。そして、美術部に入っている。男が美術と思うかもしれないが、運動部で汗を流すよりも、絵を描いている方が好きなのだ。

そして今日も僕は、美術室で活動している。一人の後輩と共に。

「翼先輩。」

「どうしたの碧さん。」

「いたんですよ。」

「何が。」

「幽霊ですよ。」

またか。彼女は、柳川碧さん。怪談や幽霊といった、オカルトが好きな少女だ。何も言わなければ、大和撫子のようなのに。勿体ない。

「先輩、聞いてますか。」

「え。あ、ごめん。なんだっけ。」

「だから、私は幽霊を見たんですよ。」

「はいはい。」

「絶対に信じてない。」

どうやって信じろというんだ。幽霊なんか見えないのに。いや、僕は見えるけど、信じない。

「どうせ、翼先輩には靈感がないから、そう言えるんです。」

いや、あるからね。靈感。

「そんな事言っている君はどうなの、碧さん。」

「私ですか。私は無いですけど、別のものがあります。」

「別のものとは。」

「魔術です。」

僕は啞然とした。彼女は、オカルトにはまり過ぎだ。

「どうしたんですか、先輩。」

「いや、何でもない。」

本気かな。でも、魔術なんて。

その時の僕は、そう思い信じなかった。だけど彼女は、本当の魔術師だった。

「魔術と言っても、何ができるの。」

「何と言われても、私はまだ修行中ですし。」

「なんだ。」

「でも、修行内容は普段の生活にも活かせますよ。」

「そうなんだ、例えば。」

「思考の制御です。」

思考の制御か。よく分からないな。

「これは、心を落ち着かせ、雑念を取り払う訓練です。」

「知らなかったな。」

彼女は嬉しそうに、魔術について語っていた。彼女の笑顔を見て、僕は少し胸が苦しくなった。僕はいつも仮面で本性を隠しているから、彼女の笑顔が眩しかった。

そう僕は、道化だ。仮面の下を見せない、道化師だ。

「先輩。どうしたんですか、何も無い所を見ていて。」

「何でもない。」

そういつて僕は、笑った。だけど、彼女は少し不機嫌になってしまった。

「どうしたの、碧さん。」

僕の質問に対して、彼女が返した答えは。

「翼先輩の道化師。」

彼女の言葉を聞いた瞬間、時間が止まったかのような衝撃を受けた。まだ少ない期間しか、一緒に活動していないのに彼女に僕の仮面のことを言い当てられてしまった。

「昔に何かあったのですか、先輩。」

碧さんは、今までとはまるで別人のように冷たい目で僕に問いかけてきた。僕が、何も答えられずにいると「自分に嘘を吐くのは、

やめたらどうですか。」と言われた。

彼女は、僕の過去を何も知らない。なのに知っているかの様に、次々と僕の心を読んでいく。

「碧さん。君は一体、何者なんだ。」

「私ですか。」

彼女は、笑っていた。」

「私は、魔術師です。」

少し不気味な笑顔で、彼女は言い放った。

何もかも見透かしている様な目、そして全てを知っている様に、語る口。でも、彼女は何も知らない。僕の過去の出来事なんて。知っている人なんて、いないのだから。僕も過去は、魔術師だったのだから。そうあれば、今から四年前のことだ。

嘘とマジック 2

僕はまだ駆け出しの魔術師だった頃、ある事が起こり、僕は魔術師でいることをやめた。

その日はいつもと変わらず、学校に通っていた。そこでは、いつもの様に授業を行っていた。周りの人には、僕が魔術師だということとは知られていない。知られたら、大変なことになりそうだった。

僕は、周りに合わせて仮面を被っていた。家でも、学校でも。

でも、たまに思うことがある。それは、「いつまで僕は、道化師でいればいいのだろうか。」という疑問が。

本当は、仮面なんか被らずにいたい。そう思うのだが、周りが怖い。ここまで作り上げてきたものが、崩壊しそうで怖いのだ。だから今日も僕は、道化をする。

昼休みになって、僕は独りで屋上にいた。学校の中だが魔術を扱うのだから、訓練を怠ってはいけない。基本は家でも出来るが、術は外でないと出来ないのだ。だからここで訓練しているのだ。

「師匠。どこですか。」

そこは誰もいないはずの屋上なのに、少年は叫んでいる。

「いたいた。師匠、探したんですよ。」

他から見れば、少年が独りで話しているようにしか見えないだろう。だが、彼には師匠の姿が見えている。そう、少年は亡き者と会話しているのだ。

「師匠。今日は、どんな術ですか。」

この時の少年の目は、輝いていた。誰にも見せることのない輝きを。希望を。

そんなある日。少年は、魔術用に使っていたノートを落としてしまったのだ。そのノートをクラスの人に拾われてしまった。

「高瀬が、オカルト好きだったなんてな。意外だ。」

「このこと、言わないでくれる。」

「言うものか。人の趣味には口出ししないよ。」

「ありがとう。」

「ただし、もう落とすな。他の奴だと、うるさいぞ。」

「分かった。」

「またな、高瀬。」

その日以来、僕はその人に会わなくなった。僕は毎日、学校に言っていたが、その人物は引越しをしてしまったのだ。短い会話だったが、初めて本音を言えた気がした。その人となら、心から笑える気がしていたのに。

「師匠。どこですか。」

「今日はどうした。なんだか、暗い顔をしているな。」

「クラスのある一人の生徒が、引越しをしたのです。僕が初めて心から話せる人間だと思っていたので、寂しくて。」

「その人物なら、死んだよ。」

「嘘ですよ、師匠。」

「残念だが、本当なのだ。」

「嘘です。そうやって僕を騙そうとしても、信じませんよ。」

「ならば、その人の名を呼ぶが良い。きっと姿を現すだろう。」

「もういいです。ここにはもう来ません、師匠にも会いに来ません。」

「翼、待て。」

「さよなら、師匠。」

その日以来、僕は師匠に会いに行かなくなった。屋上にも、もう行かなかった。そして、魔術もやめた。

嘘とマジック 3

今日、僕は久しぶりに屋上に上がった。屋上という場所に来るのは、四年ぶりだ。あの事があって以来、もう二度と来なかったからな。今日、ここに来たのはあることを確かめるためだ。

「優。山本優。」

これで出て来たら、僕はもう過去から逃げない。だが、出て来なかったらもう二度と魔術師には戻らない。

しばらく待つてから、諦めて帰ろうと屋上の扉に向かった時、声がした。僕は振り返って、その声の主を確かめようとした。

「僕を呼んだのは、君か。」

そこには、僕が呼んだ山本優がいた。

「優。」

認めたくなかった。優がもう、この世にいないということ。

「君は、高瀬か。」

「そうだよ。」

二人は、しばらく話していた。だが、翼の頭の中は師匠のことを考えていた。

「じゃあ僕は、そろそろ行くね。」

「分かった。」

「またな、高瀬。」

そして優は、空の彼方へと消えて行った。

「さてと、今度こそ師匠に謝ろう。」

翼は心を落ち着かせ、師匠を呼んだ。

「師匠、僕です。高瀬翼です。お話があるので、会いたいです。」
「どうか、届きますように。」

だが、待てども待てども師匠が現れる様子はなかった。
「無理なのかな。もう会えないのかな。」

諦めかけた時、空から何かふわりと降りてきた。

・ワシを呼んで、どうしたのだ。翼。・

「師匠。」

師匠は笑っていた。昔、僕は師匠から離れていったのに。彼の頬を、涙の雫が流れていった。

「ごめんなさい。師匠、ごめんなさい。信じなくて、ごめんなさい。」

・もう、いいさ。さあ、泣くのをやめな。・

「師匠、もう一度僕に魔術を教えてくださいませんか。」

・もちろん、良いとも。・

「ありがとうございます。」

彼は、もう一度魔術師になることにした。そして、このやり取りを影で見守る人物がいた。

（なんだ、翼先輩も魔術師だったの。）

碧さんは、納得した。そして、彼が自分で話してくれるのを待つてあげようと思った。

（さてと、そろそろ授業だから帰ろう。）

そして彼女は呪文を唱えた。翼先輩に気付かれないよう、小さな声で。

『ア・モヴェメント・モメント』

彼女が唱え終わると同時に、彼女の姿は煙のように消えたのだ。た。

（あれ。今、誰か魔術を使ったのか。）

かすかな魔力の気配を感じた翼だったが、すぐに気のせいだと思いに留めなかった。

その頃の碧は。

「結界も解除したし、あとは授業に出ればいいだけ。」

・もう、気をつけて下さいよ碧さん。・

「ゴメンね。水姫。」

碧は精霊の姿が見えるのだ。この世界では、魔術師もなかなかいないのに、精霊使いなんてほんの一握りだ。

「早く行かないと、授業に遅れるの。」

そして碧は、急いで授業に向かったのだった。

翼の方はというと。

「急がないと、授業に遅れる。」

そう言いながら翼はクラスに向かった。

（そういえば、あの時感じた魔力一体何だったんだ。）

翼の頭の中には、そんな疑問が残っていた。だが、まずは授業に行くことだ。

そして翼は、クラスの中へと消えていった。

放課後。翼が部室に行くと、彼が活動する机の上にメモが置いてあった。後輩の碧さんから。急いでいたのか、走り書きで書かれていた。内容をやっと理解した翼は、走って部室を出た。向かうところは、学校の屋上。そこに来てほしいとメモに書いてあった。

翼は階段を駆け上がり、屋上への扉を開けた。すると、そこにはみどりさんと怪しい少年が争っていた。

「碧さん。どうしたんだ。」

「先輩。話しは後で。まずは、この人をどうにかして下さい。」

「わ、分かった。」

そして僕は呪文を唱えた。

『ディフェンド・ウォール』

呪文を唱えると、周りに白く光る壁が出来た。だけど、少年の攻撃で砕けてしまった。

（やっぱり、四年間の空白は辛いな。）

少年の攻撃を避けきれないと思い、目を閉じた瞬間だった。

『ペン』

叫びと共に、少年が弾かれる音がした。

「え。」

驚いて目を開くと、少年が体制を崩していた。

「先輩は危険ですから、そこで見ていてください。」

碧さんはそう言って、また呪文を唱えた。

『ア・モヴェメント・モウメント』

すると彼女は、柵の中からいなくなり少年の近くに現れた。

『ボックス』

少年を箱の中に閉じ込め、そして冷たい表情で呪文を唱えた。

『フォウエディング』

唱え終わると少年は、跡形もなく消え去っていた。僕は、呆然と立っていた。

「大丈夫ですか、翼先輩。」

「う、うん。」

「先輩も魔術師だったんですね。」

「まだただけど。碧さんは、修行中と言っていたわりには強かったよね。」

「あれは、全部白魔術ですよ。私は、黒魔術の修行をしているんです。」

黒魔術は、攻撃系の魔術。反対に白魔術は、治癒や防御などの魔術だ。初めのうちは、どちらも覚えた方がいい。

彼がふと、彼女の方を見た。すると、彼女の隣には青みがかつた銀の髪をした女の人が、碧さんを見守るようにして立っていた。

「碧さん。その女性は。」

「そっか、先輩は見えるんだね。この人は、水姫。私と契約している、上位の精霊です。そして私は、精霊使いでもあります。」

試し様な目で、僕を見る碧さん。きつと、変な目で見られると思ったのだらう。そんな碧さんに僕は笑って「そっか。」と答えた。

「驚かないんですか、翼先輩。」

「驚くもなにも、僕だって凡人ではないし。」

「そうでしたよね。」

「まあな。それより、何で争ってたんだ。」

「まず、どこから説明しよう。」

碧さんは、説明を始めた。

「部室に行った時、強い魔力を感じたのでメモを残して屋上に来た

のです。」

すると、そこにさっきの少年がいたのだと彼女は説明した。

「でも、彼は魔術を使わなかったよね。碧さん。」

「そうですね。おそらく、操られていたのだと思います。」

「そして、その少年はどこに行ったんだ。」

「私の家です。」

「何の為に。」

「情報収集です。先輩も一緒に来ますか。」

僕は少し悩んだが、行くことにした。

「行ってもいいかい。」

「はい。では、正門で待ってます。」

そして彼女は呪文を唱え、消えていった。

僕は、歩いて行けと。」

僕は渋々、正門に向かった。

正門に行くと、碧さんが待っていた。

「先輩、遅いですよ。」

「遅いといっても、君は魔術で移動したじゃないか。」

「そうですね。では、行きましょう。」

「行くと言っても、どうやって。」

「呪文で、移動するんですよ。」

「移動って、まさか。」

碧さんは笑った。嫌な予感がした。

「しっかり捕まって下さい。そうじゃないと、異空間に閉じ込められますよ。」

僕は、寒気がした。

「では、行きますよ。」

僕は碧さんに捕まった。異空間に閉じ込められはなかった。

『フォウエディング』

僕達二人の下に魔方阵が現れ、光が僕達を包んだ。

「先輩、目を開けて見てください。綺麗ですよ。」

そう言われ、僕は目を開けてみた。

「凄い。」

そこは、僕たちの生活している空間とはまったく違った空間が広がっていた。様々な色が入り混じった空間。だけど、神秘的だった。

「ここは。」

「ここは、異空間です。ここを通って、私は移動しているんです。」

「そうなんだ。」

「もうすぐ、私の家に着きますよ。」

異空間の先に、住宅街のような風景が見えてきた。

「行きますよ。」

「分かった。」

そして僕達は、異空間から出た。すると、そこはある家の前だった。

「ここが、私の家です。」

「そうなんだ。それにしても、広そうな家だね。」

「そうでもないですよ。さあ、入りましょう。」

そして僕は、碧さんの家に入った。

家の中は、部屋が多くて迷子になりそうだった。

「この家の人って、全員普通じゃないのか。」

「よく分かりましたね。先輩。」

「これだけ部屋が多ければ、そう思うでしょ。」

「私の家族や、親戚は全員何らかの能力者なんですよ。」

「そっか。」

「はい。でも、家族の中で私は特別のようなのです。」

「何で。」

「精霊使いなんて、他の能力よりもとても難しいんです。だから、羨ましがられていたりしているんです。」

「そっか。」

「でも私は昔、能力を暴走させたことがあるので、怖がられてもいるんです。」

「大変なんだね。」

「ええ。さあ、着きましたよ。ここが、私の部屋です。」

碧さんがドアを開けると、そこには女の子らしい部屋が広がっていた。

「へえ、碧さんにしては意外だね。」

「失礼です。さあ、行きましょう。」

「どこに。」

「少年のいるところにです。」

「え。まだ、移動するの。」

「はい。そうですが。」（嫌な予感がする。）

「さあ、ここから行くんですよ。」

彼女が指を差した先には、何も無かった。

「ここからって、どこにも入り口が無いじゃん。」

「何言ってるんですか。忘れましたが、私は魔術師ですよ。見え見えの入り口なんて、作りませんよ。」

（なんか嫌だ。）

『オープン』

すると、先程まで何もなかった床に、突如地下へ続く階段が現れた。

「行きましょう、翼先輩。」

言われるがまま、僕は碧さんについていった。階段は思っていたよりも長く、狭かった。まだ、着かないのかと思った時、碧さんが「もうすぐで、着きますよ。」と言った。

長かった階段が終わると、開けた場所に着いた。

「着きました。ここが、私の魔術部屋です。」

そこには床から天井まで、本で埋めつくされていた。

巨大な本棚を抜けると、部屋の真ん中にぽっかりと空いた空間があった。中心には、魔方陣が描かれていた。その中に、箱に閉じ込められた少年がいた。「大人しいですね。魔術の届かない範囲に、来たんでしょうね。」

「そうなの。」

「そうだと、思います。」

そう言って、碧さんは少年に近づいた。少年は碧さんを見ると「出してくれ。」と言った。だが、碧さんはなかなか少年を、箱の中から出さなかった。僕は、二人のやり取りを後ろから見守っていた。しばらくして、立っていた少年が倒れた。走って近寄ると、碧さんが「彼は、寝ているだけです。少ないですが、情報はいただきました。そして、ここでの記憶もけしたので、学校に移動させます。」

「その方が、いいね。」

「ではそうするので、少し離れて下さい。」

そう言つと彼女は、呪文を唱えた。そして、少年は姿を消した。

「これで、一段落だね。よかった。」

「そうですね。そして、先輩。」

「どうしたの。」

「弱過ぎです。」

仕方ないだろ、四年間も空白があるんだから。

「まあ、まだ駆け出しなんですもんね。」

「うん。」

頷くしかなかった。僕はまだ、彼女には敵わない。まだまだ、修行しなければ。

「さてと、そろそろ私の部屋に戻りましょう。」

「そうだね。」

そして、僕達は地下室から出ていったのだった。

嘘とマジック 4

昨日は、色々あったな。碧さんが魔術を使うし、怪しい少年は出てくるし。疲れたな。

そんなことを思いながら、僕はいつもと変わらずに学校に行っていた。

「おはようございます、翼先輩。」

そう呼ばれ振り向くと、碧さんが立っていた。

「おはよう、碧さん。君の家って、こっちの方だっけ。」

「そうですよ。いつもは、魔力の消費を抑えるために、歩いて通学しているんですよ。」

「そうなんだ。」

そして僕は、碧さんと月樹高校まで一緒に登校した。その間に、昨日のことを話していた。

「翼先輩は、強大な魔力の持ち主です。ですが、気を付けないと魔力が暴走します。」

「分かった。」

「せめて、自分を守る術ぐらいは、しっかりと身につけてくださいね。」

「はい。」

後輩に、こんなことを言われるなんて。それにしても、周りが静かだな。

僕が周りを見回している事に、気がついた碧さんが「私が、話を聞かれないようにしたんです。」と言った。

「そんな事も、出来るんだ。」

「そうですよ。」

「僕も、早く出来るようになりたいな。」

「頑張ってくださいね。」

少し胸が苦しくなったのは、気のせいだろう。

「そういえば、魔術師って魔力を感じることもあるのかな、碧さん。」
「ありますよ。力ある者は、力ある者に引かれると言いますから。」
「そっか。」

力ある者は、力ある者に引かれるか。確かにそうだな。
そして、僕達は学校に着いた。

「では先輩、放課後に会いましょう。」
「そうだね。」

そう言っ、碧さんは去っていった。僕はしばらく、その後ろ姿を見送った。そして僕も、クラスに向かうために歩きだした。

放課後になり、僕は部室に行った。先に来ていた碧さんが、僕に近づいて来た。

「こんにちは、翼先輩。」
「こんにちは。」

「今日は、何事も無ければいいですね。」
「そうだね。」

昨日は、大変だったからな。

「そうだ、先輩。こんな怪談、聞いたことがありますか。」
「どんなこと。」

「屋上に上がるための階段は十二段あるのですが、ごくたまに十三段になるようなんですよ。」

「そうなんだ。」
また、始まったよ。碧さんのうんちくが。

「先輩、聞いていますか。」
「いや、聞いてない。」

「素直にそう言われると、傷つきます。」
「自分が、嘘を吐くなと言ったじゃないか。」

「そうでしたよね。」
碧さんは、少し泣きそうな顔になった。

この時の僕は、まだこの感情が何か分からなかった。
「翼先輩。」

「どうしたの。」

「精霊が騒がしいのです。」

「え、どうしたんだろう。」

「聞いてみます。」

彼女は、精霊に話し掛けた。何か、沢山話しているようだ。

「先輩、大変なことになっているようなんですよ。」

「どんなこと。」

「また、出たみたいなんですよ。」

「嘘だろ。」

「屋上に出たみたいです。」

「またか。」

今度も屋上か、大変だな。行くなんて、言わないでくれよ。

「先輩、行ってみましょう。」

本当に行くのか。

碧さんに手を引かれて、僕は部室から出ていった。

「水姫、どこ分かる。」

「はい、屋上に続く階段です。」

僕はそれを聞いて、驚いた。まさか、本当なのだろうか。偶然にしては、出来過ぎている。だが、本当かはまだ分からない。もしかして、彼女は未来を見ることが出来るのではないのだろうか。

昔の古い魔術書には確か、未来の見える魔術師はごく僅かではない。そしてその能力のほとんどが、自分で修行して得なければならぬ。遺伝する可能性は、ゼロに等しい。

「先輩、もう着きますよ。」

「分かった。」

碧さんに呼ばれ、僕は想像から戻ってきた。

「今回の敵は、どんな感じなんでしょう。」

「どうなんだろう。」

そう答えながらも、僕の脳内は回想をしていた。それは、魔術を習っていた時よりも前のことだった。僕が、興味半分で古い魔術書

を見ていたときのことを。

「翼先輩、敵が現れました。」

「そうみたいだね。」

現れたのは、一人の少女だった。

「あなたが、この現象の犯人ね。」

「え。」

「この階段の謎の。」

「そう、私は幻影使い。」

そんな言葉が聞こえたと思ったら、彼女の姿は消えていた。

「幻影を使われてしまった。」

「そのようだね。」

「暢気な事を言っていないで、考えて下さいよ。」

と言われても、僕は弱いつて言われてしまったし。

そんな時、脳内に過去の映像がはつきりと蘇った。

『カンセラシヨン・イリュウジョン』

僕はいつの間にか、そう唱えていた。すると、先程までいなかったいた少女が出現した。

「何故、私の術を解くことができた。」

「実は僕にも、分からない。」

「まあいい。君とはまた会いそうな気がするよ。さらばだ。」

彼女は煙のように消えていった。

「先輩。さっきの魔法はとても古い魔術で、普通ではなかなか出せない、上位の魔法なんですよ。」

碧さんは、驚きを隠せないようだ。僕だって驚いているんだから。何で、あの言葉が出てきたのか分からないんだから。そして、さっきの碧さんの言葉が気になるな。聞いていいのかな。

「碧さん、あのさ。」

「先輩、その先は言わないで下さい。もう分かっています。」

僕は驚いて、何も言えなかった。

「そうです。私は未来を見ることが出来る魔術師なのです。」

やはりそうだったのか。だからさっきの発言が、彼女には出来たんだ。

「そして、この後の出来事も分かります。聞きたいですか。」

僕は迷ったが、正直聞きたかった。

「聞きたい。」

「分かりました。今から映像を見せますので、心して下さい。」

「分かった。」

「では、いきます。」

そして、目の前に映像が広がった。

嘘とマジック 5

映像の中では、未来は悲しいことが起きていた。

そこは、悪が正義となっている世界だった。街の中心地は豊かだったが、一步町から出ると木々は枯れ果て、砂だけがそこにあつた。今、世界を動かしているのは、幻影が加わっている組織だ。主に人々に顔を出しているのは幻影なのだが、他にもきつと組織の一員がいるはずだ。だが、その姿を確認する前に映像は変わった。

今度は、街外れの所になった。そこには、一軒の小さな家があつた。まるで街と敵対するように、その家は佇んでいた。家の中から、微かに女性の声が聞こえた。その声を知っているような気がした。声をしっかりと聞く間も無く、すぐに映像は消えてしまった。残ったのは何事も無かつたかのように、いつもと同じ部室の風景だった。「これが、私の見た未来です。」

僕は黙り込んだ。碧さんは、このような映像を見てきたのだと思うと、何も言えなくなった。

「翼先輩、大丈夫ですか。」

「うん、大丈夫だよ。」

「そうですか、良かった。」

彼女の顔には、いつもの笑顔が戻っていた。だがそれもほんの一瞬のことと、すぐに真面目な顔になった。

「私は、あのような未来にしたくないのです。だからこの力を利用して、彼等を倒していきたいのです。でも今の私は力不足で、彼等にはまだ敵わないのです。だから、翼先輩。私に力を貸して頂けませんか。」

僕の中で、答えはもう決まっていた。

「もちろんだよ、碧さん。」

すると彼女の顔は、明るくなった。

「ありがとうございます、翼先輩。」

やっぱりさつき僅かに聞こえた女性の声と、碧さんの声は似ている。そして彼女の声を、僕は知っている。それはいつも会っているからではなくて、遠い記憶の中に微かに響いているのだ。碧さんに似た声が。

「先輩、そろそろ帰りませんか。」

「そうだね。」

そして、僕らは学校から出て行った。

なんだか碧さんとしやべっていると、帰る時はいつも月に笑われているのだ。ここ最近、日暮れも早くなってきたいて以前と同じ時間に帰ると、とても暗くなってしまうのだ。

僕は家に着き、壁際の電気を点けた。「ただいま」と言っても、誰も家にいない。この家に住んでいるのは、僕一人だ。両親は実家にいて、僕はここで独り暮らしをしているのだ。実家からこの学校に通うのは、とても遠いから僕がここに住むと決めたのだ。

学費や家賃は、両親の仕送りがあり何とかなっている。だけどそれでは足りないので、自分で仕事をして稼いでいる。

「もうすぐ、バイトの時間だ。行かないと。」

そして僕は、学校生活で疲れた重い体を起き上がらせ、バイトに向かうため支度をして家から出て行った。

その頃の碧は。

「先輩、大丈夫かな。」

そんなことを思いながら、私は自分の部屋にいた。今日先輩に見せた映像は、私に疲労と衝撃を与えた。あの家に住んでいるの人物を、私は知っている。だからあの瞬間に、私は映像を終了した。本当は、続きを知りたかった。怖かったのだ。いつも、こうなのだ。

未来を見ようと魔法を使うものの、途中で終了させてしまう。常に未来は変わるというのに、私は見るのを拒んでいる。

あれこれ考えても、答えなんて出なかった。結局は、先輩にメールした。その日に答えはやってこなかった。

バイトが終わり家に着くと、携帯に新着メールがあることに気が

ついた。その日は答えられずに、そのままにってしまった。

次の日。僕は嫌な予感がして、学校に早く着いた。下駄箱の中にメモがあった。「屋上にいます。」と一言走り書きされていた。僕は急いで、屋上に向かった。そうしないと、手遅れになりそうな気がしたからだ。

屋上に着くと碧さんは、風に髪をなびかせながら立っていた。

「碧さん。」

僕は、肩で息をしながらそう呼んだ。

「先輩。未来って、何ですか。」

「それは。」

僕は答えられなかった。正直僕にも、そのことは分からない。

「やっぱり、先輩も答えられない。」

彼女は俯き、僕に背を向けた。そして、柵の方へと歩き始めた。

「だめだ、碧さん。行くな。」

彼女は止まり、そして振り向いた。

「どうして、止めるんですか。逝かせてください。あの未来になるぐらいなら、死んだ方がいいです。」

「頼むから、生きてくれ。」

彼女は地面に崩れ落ち、泣き始めた。

「どうして、生きなければいけないのですか。どうして、生きると言うのですか。辛い未来しか待っていないのに、どうしてそんな事が言えるのですか。私は、何のために生きたらいいのですか。先輩、助けてください。」

何故、僕は彼女の叫びが聞こえなかったのだろうか。いや、今からでも遅くない。彼女を、碧さんを助けよう。そして僕は碧さんに近づき、手を差し伸べた。

「目的が見つからないのなら、僕と一緒に生きてくれないか。」

碧さんを止めてから、数日が経ったある日。再び、事件が起きた。今度は、街に出たようだった。僕と碧さんは、魔術を使い自分の分身を出した。彼等には学校に残ってもらい、二人で街へと向かった。

街に出ると、人々は倒れていた。まるで悪夢にでも、うなされているかのようだった。背後に人の気配を感じ、僕は振り向いた。そこには、人が浮いていた。

「誰だ。」

碧さんが聞いた。すると相手は、何も言わずに消えた。

「逃げられてしまいました。」

「そうだね。とりあえず、この人たちを運ぼう。」

「そうですね。」

僕達は倒れた人々を、安全な場所まで運んだのだった。倒れていた人達を安全な場所に運び、僕達は学校に向かった。

学校ではおそらく、もう授業は終わっているだろう。分身達は上手くやってくれたのだろうか。そんなことを思いながら、学校へと戻っていった。

帰り道はどちらも話さずに、時間だけが過ぎていった。そんな沈黙を破ったのは、碧さんだった。

「この前は、迷惑をかけてすみませんでした。先輩。」

「いいよ、碧さん。」

「あの、先輩。一つ、聞いてもいいですか、」

「何。」

彼女は少し躊躇っているようだったが、やがて質問をしてきた。

「翼先輩は、私のことをどう思っているのですか。」

彼は驚いて固まってしまった。そして俯いて、黙り込んでしまった。

「先輩、大丈夫ですか。」

僕はどう答えたらいいのだろうか。好きとは、恥ずかしくてまだ言えない。だが、何も答えないのも不自然だ。

「先輩、顔を上げてください。」

そう言われ、僕は顔を上げた。不意に、彼女の顔が目の前にあった。ビックリして後ろに下がろうとしたが、動けなくなっていた。彼女は僕に、口付けをした。僕は顔から火が出るように恥ずかしく

なっていました。

「み、碧さん。き、君は何をするのだ。」

やっと出てきた言葉ですら、ぎこちなかった。

「私は、先輩のことが好きです。先輩はどうですか。」

僕は、再び固まってしまった。なんて、伝えよう。彼女の真っ直ぐな気持ちを聞いて、戸惑っている自分がいる。そして彼女は、答えを静かに待っている。しばらく二人の間に沈黙が流れてから、僕は口を開いた。

「僕も、碧さんのことが好きだ。」

彼女の顔は花が開花するみたいに、笑顔になっていった。

「これからも、よろしくお願いしますね。翼先輩。」

「翼でいいよ。」

そう恥ずかしがりながらも、彼女に言ったのだった。

「えっと。つ、翼さん。」

頬を染めながら、僕の名前を呼ぶのだった。

「とりあえず、行こうか。碧。」

頭を掻きながら、僕は彼女に提案したのだ。

「そうですね。」

満面の笑みでそう答えたのだった。僕は彼女の笑顔を見て、目を逸らしてしまった。まだ、この状況を理解出来ないからだ。

しばらくしてから、僕たちは学校に着いた。すると校門の前で、僕たちと同じ制服を着た生徒が何人か立っていた。その生徒達から、とても邪悪な魔力を感じた。

「翼さん。」

「そのようだね。」

碧も気付いていたようだった。

「仕方ない、戦うか。」

「背中任せてください。」

魔術はまだ下手だけど、体術なら負けない。僕は、元空手道の選手だ。

「翼さん。気を付けてください。」

彼女はそう言った。僕は背中から襲ってくる相手を軽く交わして、相手の背中に回し蹴りを入れた。相手はよろめいたが、すぐに体勢を立て直してまた襲ってきた。碧の方は、魔術で傷を付けないように戦っていた。

「これじゃあ、らちが開きません。」

「そうなんだけど、一体どうすれば。」

そんな時頭に、ふと浮かんだ言葉があった。

『プリフィカション』

叫ぶのとほぼ同時に光の球体が僕達を包み、そして広がっていった。眩しくて、目が開けていられなかった。光が治まってから、目を開けると驚いた。先程まで戦っていた生徒達全員が、倒れていた。そして、邪悪な魔力の気配も消えた。

「何が、起きたんだ。」

「浄化されたのです。」

答えたのは、碧ではなく水姫の方だった。

「先程の言葉は、浄化と言う意味があります。」

「そうか。」

「とりあえず、この人達を運びましょう。」

碧が提案したので、その通りにしようと思った。

今日は、忙しかったな。そう思いながら、部室に向かっていた。

突然おかしい感覚に襲われ、近くの教室に駆け込んだ。運良く、その教室には誰もいなかった。

「何なんだ、この映像は。」

視界がおかしくなり始め、過去の忘れた記憶を思い出させた。僕の本当の存在を。

「あ、れ。」

あまりに魔力を消費したせいで、翼はその場に倒れて気を失ってしまった。

どれぐらいの時間が過ぎたのだろうか。僕が気付くと、そこは見

た事の無い部屋だった。

「ここは。」

「よかった、気が付いたのですね。ここは、私の家です。」

「ありがとう。」

碧は微笑んで「よかった。」と言った。

僕はしばらく碧の家で休み、それから自分の家へと帰っていった。だが、どうしても悪い予感が頭から消えなかった。それは、僕自身が見た映像のことだった。

家に着いても、その嫌な気持ちは消えなかった。その時の僕は、この予感が近い未来に起こることだとは予想しなかったのだった。

しばらくは、平穏な日々が続いた。何も変わらない、ただ平凡な日常だけが過ぎていった。そんなある日、やっと取り戻した僕の平穏を壊す出来事が起きた。

作家と奇術 1 (前書き)

長かったので、同じく分割しました…

作家と奇術 1

碧の様子がおかしくなり始めたのは、ほんの一ヶ月前の事だった。それは、何の前触れもなくやってきたのだった。

その日はいつものように、彼女と一緒に部活をしていた。一緒に窓の外の夕日を見ていた時に、変化が起きた。

「い、いや。」

「どうしたんだ。」

僕は驚き、彼女の肩に手を置いた。だがその手は振り払われた。

「いや、来ないで。来ないでよ。」

彼女は興奮していて、僕だという事も認識出来ていないようだった。そして部屋の隅の方に行き身を縮めて、震えていた。

「大丈夫、碧。」

彼女は答えなかった。僕は水姫に視線を向けた。

「おそらく、昔のトラウマが蘇って来てしまったのかもしれませんが、こうなってしまうと、しばらく落ち着かせた方が良いのかもしれない。」

「分かった。」

彼女は水姫と一緒に、一足先に帰っていった。そしてその日以降、彼女は学校に姿を現さなかった。僕は心配になり、碧の家に足を運んだ。だが、返ってくる答えはいつも「帰って。」だった。

いったい彼女の身に、何が起きたのだろう。そう考えながら街の中を自転車で走っていると、ふとある看板が目にとまった。

「橘探偵事務所」

まだ、事件も何も起きていないし。いや、起きているけど僕と碧が大体は片付けてしまっているし。まだ、頼ることはないか。僕はその看板の前を、通り過ぎていった。だが、今後この事務所にお世話になることになるなんて。

それから数日後のこと。予想していなかった事が起きた。碧がい

なくなってしまったのだ。僕はメールを何度も送ったが、返信は全くなかった。どうにかして彼女の生存を確認したかったが、どうすることも出来ずにいた。

学校帰り、僕は知らず知らずにおかしな所に向かっていた。気づくと、あの事務所に足が向かっていた。

「やっぱりやめようかな。」

扉の前まで来て、僕は迷っていた。だが、碧を助けてほしいという思いが強く、橘探偵事務所の扉を叩いた。

「入りました。」

扉の向こうから、少女らしき声が聞こえた。僕は言われた通りに扉を開けて、中に入った。

中に入ると、まず目に入ったのは天井まである本棚の数々。その中には難しそうな書物が入っていた。次に、ノートパソコンを抱えた十五歳ぐらいの少女が目に入った。

「そこに立っていないで、早く相談内容を言いたまえ。」

「何で、僕が相談者だということが分かったのですか。」

「扉を何度も叩いていたからだ。扉がなくなるかと思ったよ。助けて欲しいのだろう。」

この少女は何者なのだろう。そんな考えが頭によぎった。だがそんなことより今は、碧の行方を捜してもらうことが優先だ。

「碧の。柳川碧さんの、行方を捜してください。」

「分かった、ただし。」

そこで一旦言葉を切り、僕も見つめてこう告げた。

「もう二度と、同じ生活に戻らない可能性が高いが、それでもその少女を見つけないのかい。」

目の前の少女は、僕にそう話した。心はもう決まっていた。

「お願いします。助けてください。」

「分かった。全力で柳川碧を見つける。」

「ありがとうございます。」

「まずは、君の名を聞こう。」

「僕は、高瀬翼です。」

「そうか。私は橘琴乃だ。よろしく、翼。」

琴乃は手を差し出した。小さな右手だった。僕はその手を握り「よろしくお願いします。」と言った。

「さてと、どこから探そうかな。」

そして少女は、地面にチョークで絵を描き始めた。しばらくして絵が出来上がった。すると、絵が少しずつ、立体感を持ちはじめた。「見ていたまえ、これから面白いことが起きる。」

彼女が描いたものは、白い鳩だった。その鳩は地面から飛び出した。少女が近づき、鳩を撫でた。

「これでこの鳩は、柳川碧を探すだろう。きっと見つけるさ。」

鳩が少女の腕の中から、空へと飛び出していった。その間にも琴乃は様々な生き物を描いていた。琴乃が生み出した生き物は、全て白かった。まるで、チョークのように白かった。

「とりあえず、しばらくは様子を見よう。」

そして琴乃は再び、ネット世界へと戻っていった。

その日はもう帰っていいと言われたので、僕は素直に家に帰ることにした。だがどうしてもあの光景が、脳裏に焼きついたままだった。あの少女が描いた生き物が、立体になっていく光景が。そしてその光景とは、別の光景が浮かんた。碧が笑っていた姿が。どうして僕は、失ってから大切なものに気がつくのだろう。

「まだ、失ったわけではない。」

自分に言い聞かせるように呟いた。そう、まだ失ったと決まったわけではない。だから諦めるわけにはいかない。きっと碧は、以前のように笑って戻ってきてくれるはずだ。そう信じていないと、おかしくなりそうだった。

次の日も、学校が終わってから探偵事務所に向かった。何かしてないと、落ち着かないのだ。

「こんにちは。」

「また、君は来たのかい。どれだけ君は、暇なのだ。」

僕は何も言えなかった。

「まあ、心配なのは分かるが。ここに来て、何も変わらないぞ。」
琴乃の言う通りだと思った。ここにいるても何かが変わるわけでもない、でも帰りたくもない。

「ここにいるても構わないが、静かにしてくれよ。」

「分かった。」

そして僕は床に座り、原稿用紙を広げた。

「君はもしかして、作家なのかい。」

「目指しているだけだよ。」

僕は小説家を目指しているのだ。だけど、まだまだ未熟だ。

「世界には、自分より上手い人が何万という。そう思っているのかね。」

僕は驚いて、ボールペンを落としそうになった。何故なら、今僕が考えていたことを目の前にいる少女は、答えたのだ。

「何故、分かった。という顔をしているね。何故なら、君の顔に出ていたからだよ。翼。」

「え。」

思わず、変な声が出してしまった。このときの僕はおそらく、とても間抜けな顔をしていたのかもしれない。

「まあ、そんなことはいい。とりあえず、これを見てくれ。」

それは、僕の住んでいる所のすぐ近くだった。

「この映像は、私が描いた生き物を通して届いた映像だ。ここを見てくれ。」

そこには僅かにだが、僕の知っている人影が写っていた。

「碧さん。」

久しぶりに見たその姿は、一緒に過ごしていた時よりずいぶん印象が違っていた。

「彼女が、柳川碧か。ずいぶん、暗い様子だな。彼女の中で、何かが崩れたのかもしれない。この様子では連れ戻したとしても、この状況は変わらないだろう。」

せつかく見つけたのに、状況が変わらない。それでは、碧が可哀想だ。

「助けていかい。」

「はい。」

「彼女の過去や、隠していたことも全て受け止めなければならない。それでも良いのかい。」

碧の過去。隠しておきたいこと。全部受け止めなければ、彼女は助けられない。ならば、受け止めよう。彼女の全てを。

「決まりだな。」

「はい。」

すると琴乃は、流れるような感覚でキーボードを打ち始めた。少し間を置いてから、様々なウェブサイトが開いた。そこには、個人情報や経歴。他にも関連する可能性のある事件など、様々だった。

「これは、どうやって。」

「ちよつと、セキュリティをいじれば出来るのだよ。」

普通は出来ないからね。なんなんだこの少女は。セキュリティをいじるとか、もはやクラッカーとしか言いようがない。

「どう解釈してくれても構わないが、とりあえず君は考えている事を顔に出さない方が良いと思うが。」

また、指摘されてしまった。自分でも分かっただけはいるんだが、どうも顔に出てしまうようだ。うなだれていると、背後から琴乃に呼ばれた。

「翼、ちよつとこれを見てくれたまえ。」

琴乃に呼ばれてパソコンを覗き込むと、そこにはある事件の新聞記事が載っていた。

「これは想像に過ぎないが、この事件は関係あるのではないのか。」
ビルの火災事件。ここ周辺で起きた事件だった。その時に多くの死傷者が出たが、奇跡的に助かった人がいた。
「嘘だろ、こんな事って。」

作家と奇術 2

助かったのは、高橋碧。顔写真を見ると、今の彼女の面影があった。当時の彼女は、まだ五歳だった。そして、この事件に巻き込まれた。おそらく両親は、亡くなってしまったのだろう。そして今の家族に、養女としてもらわれたのだろう。

「君の考えていることは、当たっているよ。柳川碧の旧姓は、高川つまりこの事件で両親を失い、行く宛てを失った少女を柳川家が引き取った。そう考えた方が妥当だろうね。」

おそらくこの事件が、彼女のトラウマなのだろう。だからあの時、燃え盛るような夕焼けの空を見て、蓋をしたはずの記憶が蘇ってきた。そして彼女はほとんど意識しないで、水の精霊である水姫と契約をしたのだろう。火は、水に弱いからだ。

「君に、ひとつ聞いてもいいかい。」

「どうした。」

「君は、魔術師を信じるかい。」

「見た事が無いから、何とも言い難いが。何故だい。」

「実は、僕と碧は魔術師なんだ。」

「そうか。」

予想していたよりも、あっさりとした反応が返ってきて僕が驚いた。

「私も普通ではないのだから、魔術師がいたっておかしくは無い。」

ましてや、目の前の人間が魔術師であろうとも、私は驚かない。君だって見ただろう。」

そうだった。この少女は、自分で描いた絵を立体にして操ることが出来るのだった。

「そうになると、今回の探し人は特殊なわけだな。」

「そうなるな。」

「少し難しくなりそうだな。」

「どうして。」

「魔術だから、姿をくらますのは簡単だ。だから、私の能力が通じない可能性が高い。」

目を伏せて、そう琴乃は呟いた。その表情を見て、思わず僕は思っていたことを口に出していた。

「僕も何か手伝うよ。琴乃。」

少女は顔を上げ、大きな丸い瞳をさらに見開いた。そして、その瞳に涙を溜め始めた。だが、すぐにそっぽを向いてしまい顔が見えなくなってしまうた。

「どうにかして、彼女の居場所を探し出せないか。翼。」

「魔術をまだ覚えていないから、出来ない。」

「探索用の魔術か。確か入り口から数えて、五列目の右の三番目の本棚にあったはずだ。探してみたまえ。」

「分かった。」

そして僕は、言われた通りに探し始めた。本棚は見つけたのだが、天井まである本棚の中から目的の本を探す作業はとても難航した。約二時間後。僕は、琴乃に本の題名を教えてもらい、やっと見つけ出すことが出来た。

「ありがとう、琴乃。読ませてもらうね。」

「いいとも。」

中を開くと、魔術用の言葉が並んでいた。この解読を知らない人にとつては、単なるよく分からない本なのだが、知っている人にとつてはとても強い味方になるのだ。だが問題は、解読に時間がかかることだ。

「さてと、どうやって解読しようかな。」

「やはり時間がかかるようだな。」

「そうなんだよね。」

「私も読んでは見たのだが、さっぱり分からなくてな。」

やっぱり読んでいたんだ。でも、解読方法がないと分からないかな。だけど何故琴乃は、探索用の魔術の本がこれだと分かったの

だろうか。

「それは棚。題名を並び替えるとそうだったので、そうかと思ったのだ。」

なるほど。なんだろう、この違和感は。

「人の考えを読まないでくださいよ。」

「仕方ないだろう。君の顔に出ているのだから。」

また、言われてしまった。なんで、顔に出してしまうのだろうか。

「それよりも、解読するのに時間がかかりそうなので、この本を借りて行ってもいいですか。」

「いいとも。」

「ありがとうございます。」

お礼を言って、僕は家に帰る支度を始めた。借りた本も、鞆の中にしまった。

「では、僕は帰ります。」

「少し待っていてくれ。」

そして琴乃は、何かを書き始めた。書き終わるとその紙切れを、僕に渡した。書いてあったのは、アドレスだろう。

「私のアドレスだ。何かあれば、連絡を入れてくれると助かる。」
「分かった。」

僕は立ち上がり、扉に手をかけた。一度だけ振り返り、琴乃を見た。だが彼女はすでに、銃声のようにキーボードを叩いていた。扉に向き直り、部屋を出た。

家に着いてから、机の上に借りてきた本とノートを広げた。そして、何時間も解読に取り組んでいた。幸いなことに明日は休日なので、徹夜することが出来るのだ。

「さてと、少し休憩しないとな。」

僕は一息吐くために、紅茶を入れた。作業は予想通りに難航していて、様々な資料と見比べないといけなかった。過去の魔術関係の本など、様々な視点から見えていった。そのおかげで少しだが、解読が出来ていた。机に再び向かい合い、解読作業を再開した。

作家と奇術 3

僕は、とても不思議な空間にいた。そこには、テレビを眺めているような所だった。何故か映像には碧が映っていた。どこのなかはよく分からないが、暗いところで泣いているようだった。

「碧さん。」

そう呼びかけたが、聞こえるはずが無いと思っていた。だが彼女は振り返り、一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐに助けを求めようと僕を見つめていた。

「絶対に見つけ出して、碧を助けるから。もう少し待っていてくれるか。」

碧は頷き、そして微笑んだ。

そこで映像は切り替わり、今度は琴乃が出てきた。

「やあ、翼。君も夢渡りが出来るのかい。」

夢渡り。何のことだろうか。

「分からないのなら、それでいい。無意識に使っているだけのようだからね。それよりそろそろ君は、部屋に行って休んだらどうだい。」

「何のこと。」

「起きて自分の状態でも、確認でもして見たら分かるだろうよ。」

そこで映像は消え、僕は起きた。画面の中で琴乃が言っていた通り、僕はそろそろ部屋で寝た方がいいだろう。僕は立ち上がり、寝室のベットに倒れこむようにして再び深い眠りに入っていた。

次の日になり起きた僕は、とりあえず昨日までの作業をまとめた。少しだけだが、解読は出来てきた。だがまだまだ、量があつて今日中には終わらないようだった。それもそのはずだ。何故ならこの本を書いた作者は、偉大な魔術師だと言われていたからだ。その人物が書いた物なら、難しいのも無理が無い。現代の魔術師は解読を始めようとすると、まずぶつかる壁は過去の魔術所の難しさだ。その

次に、どうやって解読したらいいのか分からない事だ。僕も只今、その壁にぶつかっているのだ。

「途中経過を、琴乃に伝えよう。」

僕はパソコンの電源を点け、昨日渡された琴乃のアドレスを持ってきた。そして、琴乃宛てにメールを送信した。おそらく彼女は、今もネットの世界にいるのだろう。孤独に、その膨大な情報の中で漂っているのだろう。秒単位で更新される情報の中を、情報の一部のように彷徨い続けて必要とされる居場所を探しているのだろう。

そんなに時間が経たないうちに、琴乃から返信が来た。内容には「もっと詳しく知る必要があるので、本と解読した文を持って事務所に来てくれ。」と書いてあった。

「僕は、助手かよ。」

ツツコミを入れながら支度をして、僕は指示されたように本と解読した文章を持って、事務所に向かうために玄関の扉を開けた。外に出ると、底冷えする寒さだった。やはり、冬の朝は寒い。マフラーを首に巻き、自転車にまたがり出発した。

「やっぱり、少し遠いな。」

僕の家から、琴乃がいる橘探偵事務所までは歩いて行くと一時間かかる距離があるが、自転車だと約十五分程で着くことが出来る。なので事務所までの移動手段は、自転車になっている。

「着いた。よし、入ろう。」

僕はいつものように、扉をノックした。そして、いつものように琴乃の返事が返ってくる。何も変わらないやり取りだ。だが僕と琴乃は、依頼者と探偵という関係だけなのだ。探偵は、依頼で動く。依頼者の依頼したことを遂行するためには、過去も現在も秘密も全て暴くのだ。まるで死者の墓でも暴くように。

「琴乃、頼まれた物持ってきたよ。」

「ありがとう。見せてくれたまえ。」

僕は持ってきた資料を、琴乃に手渡した。彼女は目を通して、すぐにパソコンに打ち込みをした。

「とりあえず、文章にしてみた。これで、意味は通じるだろう。」
その文章に視線を落とすと、表現なども上手く表現されていて小説家のような文脈だった。

「どうやって、こんな表現覚えたの。」

「私を誰だと思っている。本で過去を知り、ネットで現在を知る。そしてその二つを合わせて、隠された真実を見つけ出す探偵だ。」

やっぱり、琴乃はただ者じゃない。とんでもない人物に出会ってしまったと、この時になってやっと自覚したのだった。

「全ての解読が終わったら、私に連絡を入れてくれ。ただし、無理はしないように。君は依頼者なのだから。」

「分かった。」

「私からも、進展があつたから報告しよう。」

「どんな進展。」

「彼女の後をつけていた生き物からの映像を、まずは見てくれ。」

そして液晶画面に、映像が流れ始めた。そこに映ったのは、碧の後姿だった。少し見上げるような映像なので、犬や猫が撮ってきたのだろう。しばらくは道に沿って進んでいた碧だったが、角を左に曲がった。映像を撮っている動物も後を追ったが、その時はすでに遅くて彼女は跡形も無く消えていた。そこで映像は止められた。

「彼女は、おそらく気がついたのだろうね。だから、魔術を使って姿を消した。勘が冴えているのだろう。」

「そうだろうね。」

やっぱり彼女は、何か普通の人には無いものを持っているのだろう。僕も人も事を言えないけど。

「すごく眠そうだね、翼。部屋が空いているから、休んで来るといい。」

「そうかな、寝ただけだな。」

「そうか。無理をしないように。」

琴乃はそう言って、情報の世界に戻った。僕はその小さな後姿を見ていたが、徐々に視界がぼやけはじめてついには暗くなった。

また昨日と同じ場所に僕はいた。映像の中では、今日も碧が泣いていた。声をかけると、彼女は今日も振り返った。

「君は一体、どこにいるの。」

「分からない。」

呟くようにして話した彼女は、とても弱くて触れたら壊れてしまいそうだった。

「今いる場所、安全なの。」

「多分、安全だよ。」

「分かった。今、頑張つて君を探しているから、もう少し待っていて。」

こくりと碧は頷いた。そして笑った彼女の映像は、消えていった。目を覚ますと、僕の上に毛布がかかっていた。きっと、琴乃がかけてくれたのだろう。

「おはよう、翼。部屋が空いていると言ったのに、君は本棚に寄りかかって寝るとは物好きだな。」

「ごめん。あと、毛布ありがとう。」

「勘違いをされては困る。君が体調を悪くしたら、柳川碧を搜索するのに余計に手間取るからだ。決して、君を心配したわけではないからな。」

顔は見えないが、少し慌てているようだった。そうだ、さっきの出来事を話さなければ。

「何か話したいことでもあるのかい。」

「夢に、碧が出てきた。昨日も同じだった。」

「やはり、君には夢渡りの素質があるようだ。」

「夢渡り。」

「そう。夢を伝って、他人の夢や心に入ることが出来るのだ。」

それじゃあ、昨日のもさっきのも夢渡りって事になるのか。

「そういうことだ。」

「でも昨日、琴乃も出てきたよ。」

「それは、私も出来るのだ。」

なるほど。それなら説明がつく。少し時間が経って今まで鳴っていた音が、止まった。琴乃手が止まっている。何かあったのだろうか。

「琴乃。」

「翼、これを見てくれ。」

琴乃が提示した資料を見て、僕は絶句した。

「嘘だろ。こんな事ってあるかよ。」

記事には一人の少女の名前と、ある病院の名前が掲載されていた。琴乃が住んでいる部屋を飛び出した。

「翼。」

扉の向こうから名前を呼ぶ声が聞こえるが、僕は無我夢中でその病院に向かって自転車をこいでいた。どうか無事でありますようにと、心の中で唱えながら。

病院に着き、受付で病室の番号を聞いてその部屋に向かった。部屋の前に着き、ノックしてから部屋の中に入った。ベットの上で横たわる少女を見て、僕は泣きたくなった。記事に載っていた事は、紛れも無く真実だった。記事に載っていた少女の名前は。

- 柳川碧 -

絶望と希望 1 (前書き)

切るところが見つからなくて、
適当にぶった切ってしまった…

絶望と希望 1

碧を見つけて、二週間が経とうとしている。僕が彼女に辿りつけたのは、琴乃のおかげだ。だが、望まなかった結果での再開だった。僕は琴乃が提示した記事で、碧に会うことが出来た。その記事には、碧が事故に遭い病院に運ばれたと書かれていた。

「やあ、碧。今日も来たよ。」

話しかけても返ってくるはずの無い答えを、今日も僕は待っていた。碧はもう目を覚まさないかもしれないと、そう医師に告げられたのだ。

「今日は、部活でミーティングがあっただ。年に一度の美術展についてのことだったよ。」

返事が無いのは分かっているが、話しをしていないと泣き出しそうだった。それから僕は、寝ている碧に日が暮れるまで話しかけていた。クラスのこと部活のこと、それと一緒に探してくれた琴乃のことも。

「明日も来るね、碧。またね。」

彼女に背を向けて病室の扉に手をかけたとき、後ろで微かだが確かに声が聞こえた。振り返り、再び碧の方へと向かった。すると、さっきまで寝ていたはずの碧が目を覚めたのだ。

「碧、分かるか。僕だよ、翼だよ。」

碧はまだ虚ろな表情で、僕の方に視線を合わせてきた。そして、一言呟いた。

「あなたは誰。」

言葉を聴いた瞬間、体が凍りついたように動くことが出来なくなってしまった。今すぐにでも逃げ出したいのに、足がその場から一歩も歩けなくなった。

ポケットの中で、携帯が震えた。僕は確認をするために、病室から出た。内心、助かったと思っていた。あの状況の中には、どうもい

ずらくなってしまうのだ。携帯電話を確認して、一旦病室に戻った。そしてナースコールを押して、その場から立ち去った。ぼんやりとしたままの、碧を一人で残して。

病院を出て向かった先は、碧を探すのを手伝ってくれた橘探偵事務所だ。琴乃に、碧を見つけてくれたお礼をしながらだったので、今から会いに行くのだ。しばらく事務所に行っていないので、道を覚えていくか心配だったがしっかりと記憶していた。

「久しぶりの事務所だな。琴乃は、元気に過ごしているかな。」

そんなことを考えながら、事務所の扉をノックした。

「入りました。」

久々に聞いた、幼い声。その声が、扉の向こうから聞こえた。扉を押して、中に入った。最後に来たときと何も変わらない、部屋の風景が広がっていた。天井まである、大きな本棚の列。その中にぽっかりと開いた空間に、いつもの様に琴乃はネットの世界にいた。

「しばらく顔を見せないと思ったが、どうしたのだ。大体は、予想つくが。」

「碧の見舞いに行っていた。今日目を覚ましたが、どうも記憶を無くしたらしい。」

「記憶を無くしたのか。それは予想外だった。それで、君はこれからどうするのだい。」

そう言われてみれば、どうするのなんて考えていなかった。ただ、碧を助けたかっただけだ。その先のことは考えているつもりで、何も考えていなかった。

「そつえば、まだ報酬を貰っていなかったね。」

「え、それってお金取るの。」

「仕事をしたのだから、それなりのものを貰うよ。」

「そんな。」

そんな話、聞いてないぞ。

「これから、この事務所の仕事を手伝ってもらう。それが、君からの報酬だ。給料は出すから、心配しないでくれ。」

「え。」

事務所を手伝う。僕の報酬は、それだけで良いのか。そして、給料が出る。それで良いのか。

「いいのだよ。この事務所には依頼者は来るが、手伝ってくれる人はいない。だから、君に頼むのだ。」

「こんな僕でよかつたら、引き受けるよ。その仕事。」

どうしたら良いのかも分からないなら、ここで仕事をするのも悪くない。そしたら、少しは碧のことを忘れられるかもしれない。楽しかった日々の事を。きつと、もう戻ってこないあの笑顔を。

「背を向けるのは自由だけど、彼女には君しか頼れないのだよ。そんな彼女を、君はもう一度手放すのかい。きつと君は、後悔するよ。」

「そこまで分かっているのだったら、どうしたら良いのか。教えてよ、琴乃。」

「答えは、身近にあるはずだよ。問題は、それに君が気付けるかどうかだ。」

身近に答えがある。そう琴乃は言うが、そんなものあるだろうか。そして、僕に見つけられるだろうか。

「そういうことは、何でも無い所に転がっているものだよ。必死で探している時は、見つからない。だが、忘れた頃に見つけられるさ。」

焦るな。琴乃は遠まわしに、そう言っているようだ。だが、答えなんて。そこでチャイムが鳴り、僕の思考は止められた。

「見て来てくれないかな、翼。」

「分かりましたよ。」

そう言っ立ち上がり、扉に向かった。

「どちら様ですか。」

「依頼をお願いしに来ました。」

女性の声が聞こえた。扉を開けると、そこには意外な人物が浮いていた。

「あら、お久しぶりです。翼さん。」

「水姫さん。」

水姫。碧と契約を交わしていた、精霊だ。

「おや、珍しい依頼者だね。入りたまえ。歓迎するよ、主をうしな
った精霊殿。」

「見えるのか、水姫のことが。」

「僕を誰だと思っているのかい。いい加減に気づいてくれたまえよ。」

「

そうだ。琴乃は、人であって人ではない。他人から見れば、彼女は化け物だろう。そして、僕も常人ではない。

「翼は聞きたい事が色々あるようだが、それは後にしてくれるかな
ところで、水姫君といったかな。僕にどのような依頼だい。」

「柳川碧を襲っていた人物を、探してください。」

「探しても良いが、君が敵うとは思えないのだが。」

「それでもいいのです。碧さんを守ることが出来るのなら。」

迷いの無い声で、水姫さんは言った。本当に、碧の事を大切に思
っているのだろう。それなのに、僕は。

「水姫君。君はまず、彼女の居場所を知っているのかい。」

「いえ。碧さんが家を出た日から、私は契約を取り消されましたか
ら。だから今、彼女がどうしているのかは分かりません。」

契約が取り消された。碧がそんなことをしたとは、僕には思えな
かった。

「では、何故彼女を守りたいのだい。契約はもう取り消されてしま
ったのに。」

「正確には、碧さんは精霊が見えなくなってしまったのです。そう
すると私にはもう何も出来ないのです、自然消滅のような形になりま
す。」

「そうか。だから君は、彼女を守りたいのだね。」

「そうです。」

水姫は、真剣だった。そんな水姫を、僕は止めることが出来そう

に無い。

「それならば、まずお礼をすべき人がいるよ。翼が碧君を探していなければ、彼女は今頃本当に姿を消していたかもしれないよ。」

水姫は驚いて振り向き、僕を見た。僕が頷くと、彼女は安堵して頭を下げた。

「ありがとうございます。碧さんが無事で、安心しました。それで彼女は、今はどこにいますか。」

僕は答えに困った。どうやって説明したら良いのだろうか。何も答えられずにいると、琴乃が変わりに答えてくれた。

「碧君は今、病院にいる。二週間前に交通事故があり、彼女はそれに巻き込まれた。そして、記憶を失った。」

水姫は固まっていた。表情は見えないが、彼女から言葉は聞こえない。聞こえるのは、時計の秒針が動く音とそれぞれの呼吸音だけ。

絶望と希望 2

しばらくの間沈黙が流れて、時が止まってしまったのかのような感覚になった。それを破ったのは、琴乃の機関銃のような音だった。

「先ほどの言葉は、本当ですか。」

それは、琴乃に向けられた。彼女は、手を休めずに答えた。

「病院にいる事は知っている。記憶を無くした事は、翼に聞いたただけだ。」

水姫は振り向き、答えを求めてきた。

「碧さんが、記憶を無くしたというのは。」

「本当です。今朝に目が覚めた時にはもう、僕の事を知らないようでしたし。」

目を伏せ、呟くような声が聞こえた。

「そうですか。ありがとうございます。」

そして水姫は、事務所から去ろうとした。だが彼女の背中に、琴乃は言葉を突き刺した。

「それで、本当に君は良いのかい、水姫君。」

「何のことでしょうか、橘さん。」

「いつまでも、逃げ切れると思わないことだね。水姫君、君は人を騙す狐のようだよ。」

「私には思い当たる節がございませんが。何かの勘違いではないのですか。」

水姫は微笑んだ。今まで見た笑みの中でも、一番怪しい笑みを浮かべていた。

「そうか。だが、覚悟しておくように。猫は狙った獲物は逃がさないよ。」

琴乃は、獣のような目つきで水姫を見据えていた。まるで、獲物を見つけたような目だった。それに答えるかのように、水姫も笑った。

「では、私は帰らせて頂きます。どうか依頼をお受けして下さいことを、お願いします。」

そして水姫は、扉の向こうに消えていったのだった。僕は琴乃に視線を向けた。いくらなんでも、初対面の人物にあの態度はひどいと思った。いや人物というか、精霊だ。

「琴乃、水姫に失礼にも程があるぞ。」

「そうか。君には彼女が、碧を本当に心配しているように見えたのかい。」

「どういうことだ。ちゃんと説明してくれよ。」

何かを企んでいるように、琴乃は微笑を浮かべた。

「水姫君は、碧君の事なんか心配していないのだよ。生死の確認をしたかっただけだ。それ以外の情報は、彼女にとっては無意味だ。だが記憶喪失という情報は彼女にとっては、好都合だったのかもしれないね。いや、彼女達かな。」

「今、何で。」

「水姫君達と、言ったが。」

水姫は、誰かと手を組んでいる。そして、碧を裏切ったのかもしれない。そんな考えが、脳内に過ぎった。だが、琴乃が言

ったことは本当だろうか。

「まだ、そうとは決まっていないよ。だが、可能性は高い。」

「それで、依頼は受けるのか。」

「受けるとも。おそらく君達を襲っていた団体と、水姫がいる団体は敵同士だと考えられる。」

「だから琴乃式、搜索を依頼したというわけか。でもどうして、碧を心配していないのだろう。」

「私には、分からないよ。そういうことは、君の方が専門ではないのかい。」

僕の専門。何のことなのだろうか。

「君は能力者で、魔術師だ。自分の事も忘れたのかい。」

そうだった、僕は時を見ることが出来る。そして、その人の意識に入ることも出来るのだった。

「その能力を使って、何とかしてくれ。君は僕の助手だろう、翼。」
「わかった。やるだけやってみるよ、僕は君の助手だから。」

琴乃は、笑った。それに答えるように、僕も笑った。

「琴乃、それでは行つてきます。」

「君が戻ってくるまでに、多少なりとも依頼を進めようではないか。」

その言葉を最後に、琴乃の笑顔が闇の中に消えて行つた。

これでここに来るのは、何度目になるだろうか。もうこの暗闇にも、慣れてきていた。

「さてと、ここから水姫のところに繋がるようにしないとな。」

そして僕は、沢山の人々の意識の中から水姫の意識を探した。場合によっては、居場所まで特定できる可能性があるのだと思う。集中して僕は、水姫を探した。暗闇の中、感覚だけを頼りに探していた。多くの人々の心が集まる場所の中で、たった一人を見つけ出すのはとても困難なことだった。そんなときにふと一っただけ離れた心を見つけた。

「もしかして。」

僅かながらだが、確信を持っていた。

「行つてみよう。」

僕はそつと光に近づき、触れてみた。その瞬間、おそらく水姫野と思われる者の感情が、僕の中に流れ込んできた。

喜び。悲しみ。怒り。苦しみ。様々な感情が入り交じって、複雑なことになっていた。そのなかに、気になる記憶を見つけた。それは、水姫と碧が出会ったばかりの記憶だろう。二人ともまだ、幼い顔立ちをしている。碧がおそらく小学校の低学年の年齢だろうか。

そして水姫は、中学生ぐらいだ。

碧は瓦礫の山の所で、雨に打たれながら泣いていた。それを見た水姫が、話しかけたのだろう。

「どうしたの。」

そして碧は、今までの事を話した。ここが昔は私の家で、火事で全焼してしまったこと。そして、もう家族がいないことも。この時の水姫は、本気で碧を守りたかった。助けたかったと思う。そうではないと、妖精は手を差し伸べない。

妖精は、本当に助けが必要な人以外には、加護しか与えない。しかし、その人と契約を交わせば攻撃も防御もできるようになる。妖精には、そのような決まりがある。そうになると、水姫は碧を本当に裏切ったのか。悲しくなっていた時に、見覚えのない映像を見た。

絶望と希望 3

おそらく、碧との契約が無くなった後だろう。この頃の水姫は、よく利用されていた。何かを拒もうとすれば、柳川がどうなっても良いのかと言われていたのだ。だが、従うしかなかった。今もそうだろう。

しかしそれなら、どうして助けを求めなかったのだろう。その時、事務所を去っていく青いワンピースの水姫の思い出した。あの時の彼女は、僅かだが笑っていたような気がした。そして、琴乃の言葉の意味を理解した。

「君は人を騙す狐のようだ。」

言の葉あの時すでに、水姫が自分達の敵だということを知っていたのかも知れない。そして、それを知っていて依頼を引き受けた。花柄のパジャマ少女は、何を考えているのだろうか。

「そろそろ、あの少女の所に帰ろう。」

僕はそして、暗闇の中から抜け出したのだった。

目を覚ますと、制服の上に毛布がかかっていた。きっと琴乃がかけてくれたのだろう。今は機関銃のような音を出して、ネットの世界を回っているようだった。

「ただいま、琴乃。」

「帰ってきたのか、翼。おかえり。」

そう言って琴乃は振り返り、微笑んだ。だがそれもほんの一瞬のこと、すぐにパソコンに向き直ってしまった。

「情報は集められたのかい。」

「あまり、できなかった。」

「そうか。」

「琴乃の方は。」

「こっちも同じだ。」

「そっか。」

今回は手間取りそうな、依頼だと思ったのだった。だが、僕にとってはこれが初めての依頼なので、今までどんな依頼があったのかは分からない。

「これくらいの事は、いつものことだよ。翼。」

「でも、大変だよね。」

「そうだな。」

目を伏せて、辛そうな顔をした。琴乃がその表情をするたびに、僕は胸が痛くなる。この時の彼はまだ、この感情が何なのかは分からなかった。

「依頼があれば、私は自由に情報を探し出して与えることが出来るのだ。だがなければ、私は目の前を過ぎて行くものを見送るだけだ。」

それが、私だ。

琴乃はそう話してくれたが、本当に辛そうな目をしていた。何かを壊してしまうのが恐いような、それでも誰かを助けたいような。そんな感情が、僕には読み取れた。

本当はきつと琴乃も依頼という形式ではなく、純粹に人を助けたいのだと思う。だが昔に、何かがあったのだろう。そのせいで、なかなか人に手を差し伸べる事が出来なくなってしまった。だから依頼という形で、人を助けたいのだ。それでもしなときつと琴乃は、この先ずつと独りになるかもしれない。

「翼、君は。」

琴乃が顔を上げて、何か言いたげな表情をしていたので僕は言葉の先を待った。

「私のそばにいてくれるかい。」

驚いて、つい聞いてしまった。

「それって、告白。」

「ち、違う。断じて、違うのだからな。あくまで、助手としてだ。」顔をりんごのように赤く染めて、必死で否定している姿を見るのは初めてだった。それが新鮮に感じてしまい、笑ってしまった。

「何を笑っているのだ。」

結局、琴乃に怒鳴られてしまった。そして不機嫌になって、そっぽを向いてしまった。

「笑って、ごめん。あまりにも、反応が新鮮だったから、つい。」

「な、何だと。」

「ごめん。変なこと言ったね。忘れて、琴乃。」

「それは私の台詞だ。今すぐ、その記憶を消し去ってくれ。今すぐだぞ。」

琴乃はそう言い放つと、僕に背中を向けた。

「分かったよ。だから、もう怒らないでくれ。」

だが、パジャマ少女が振り向くことはなかった。そしてそのまま僕は、深い眠りについた。

これで何度目になるだろう。もう、分からなくなってしまった。

だが今回は、一つの心しか見つからなかった。僕は恐る恐る近づいて、そっと触れてみた。その瞬間、ある人物の記憶が感情が川のように流れ込んできた。その人物は。

「琴乃。」

この記憶や感情は、彼女のものだだった。彼女が経験してきた今までの依頼や、出会ってきた人たちに対する感情などが伝わってきた。そして、琴乃が感じてきた気持ちも。

「寂しかったんだよな。誰か傍にいて欲しかったんだよな、琴乃。」
琴乃は常に一人で過ごしていて、孤独だった。誰かに傍にいて欲しかった。だが、誰も傍にいてくれなかった。そんなときに現れたのが、僕だった。どんなにネットに関して凄くても、異能者であっても彼女はまだ幼いのだから誰かに頼らなければならない。それなのに琴乃は、強がってこの事を知られたくないと思って僕に助手という形で傍に置いておきたかったのだらう。

ふと、遠くから僕を呼ぶ声が聞こえた。その声はどこか、懐かしい声のような気がした。僕は声のする方へ、進んで行った。すると急に目の前が明るくなり、目を開けていられなくなった。そして僕

はそのまま、光に包まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7129x/>

~ Artificial ~

2011年11月23日23時28分発行